

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

目次

一	午後の授業	5
二	活版所	9
三	家	12
四	ケンタウル祭の夜	16
五	天気輪の柱	23
六	銀河ステーション	25
七	北十字とプリオシン海岸	32
八	鳥を捕る人	42
九	ジヨバンニの切符	51

一 午後の授業

「ではみなさんは、そういうふう川だといい言われたり、乳ちちの流ながれたあとだといい言われたりしていた、このぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知しやうちですか」先生は、黒板こくばんにつるした大きな黒い星座せいざの図の、上から下へ白くけぶった銀河帯ぎんがたいのようなところを指さしながら、みんなに問といをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四、五人手をあげました。ジヨバンニも手をあげようとして、急いそいでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌ざっしで読んだのですが、このごろはジヨバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持きもちちがするのです。

ところが先生は早くもそれを見つけたのです。

「ジヨバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか」

ジョバンニは勢いよく立ちあがりましたが、立ってみるともうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすつとわらいました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。先生がまた言いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河はだいたい何でしょう」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたが、こんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん」と名指しました。

するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上がったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじつとカムパネルラを見ていましたが、急いで、

「では、よし」と言いながら、自分で星図を指しました。

「このほんやりと白い銀河を大きな望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな

星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう」

ジョバンニはまっ赤かになってうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼めのなかには涙なみだがいっぱいになりました。そうだ僕は知ぼくっていたのだ、もちろんカムパネルラも知ぼくっている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士はかせのうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌ざっしのなかにあったのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌ざっしを讀むと、すぐお父さんの書齋しょさいから巨おおきな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒な頁ページいっばいに白てんてんに点々のある美うつくしい写真しゃしんを二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘わすれるはずもなかったのに、すぐに返事へんじをしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午後にも仕事しごとがつかう、学校に出てももうみんなともはきはき遊あそばず、カムパネルラともあんまり物を言いわないようになったので、カムパネルラがそれを知ぼくつてきのどくがってわざと返事へんじをしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのでした。

先生はまた言いいました。

「ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるなら、もつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと言いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやつぱりそのなかに浮かんでいるのです。つまりは私も天の川の水のなかに棲んでゐるわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集まって見え、したがって白くぼんやり見えるのです。この模型を「ごらんさいた」先生は中にたくさん光る砂のつぶのはいった大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に

立ってこのレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こっちの方はレンズが薄いのでわずかの光る粒つぶすなわち星しか見えなんでしょう。こっちやこっちの方はガラスが厚いので、光る粒つぶすなわち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるという、これがつまり今日の銀河ぎんがの説せつなのです。そんならこのレンズの大きさがどれくらいあるか、またその中のさまざまの星についてはもう時間ですから、この次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河ぎんがのお祭りまつなのですから、みなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい」

そして教室じゆうはしばらく机つくえの蓋ふたをあけたりしめたり本を重ねたりする音がいつぱいでしたが、まもなくみんなはきちんと立って礼れいをすると教室を出ました。

二 活版所かっぱんじょ

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七、八人は家へ帰らずカムパネルラ

をまん中にして校庭こうていの隅すみの桜さくらの木のところに集あつまっています。それはこんやの星祭ほしまつりに青いあかりをこしらえて川へ流ながす鳥からすうり瓜とを取りに行く相談そうだんらしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ふつてどしどし学校の門もんを出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河ぎんがの祭まつりにいちいの葉はの玉たまをつるしたり、ひのきの枝えだにあかりをつけたり、いろいろしたくをしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲まがつてある大きな活版所かっぱんじよにはいつて靴くつをぬいで上がりますと、突つき当たりの大きな扉とびらをあけました。中にはまだ昼ひるなのに電燈でんとうがついて、たくさんの輪転機りんてんきがばたりばたりとまわり、きれで頭をしばったりラムプシエードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働はたらいておりました。

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子テーブルにすわった人の所ところへ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚たなをさがしてから、「これだけ拾ひろって行けるかね」と言いいながら、一枚の紙切れを渡わたしました。ジョバ

ンニはその人の卓子テーブルの足もとから一つの小さな平たい函はこをとりだして向こうの電燈でんとうのたくさんついた、たてかけてある壁かべの隅すみの所ところへしゃがみ込むと、小さなピンセットでまるで粟粒あわつぶぐらいの活字かつじを次から次へと拾ひろいはじめました。青い胸むねあてをした人がジヨバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君くん、お早う」と言いいますと、近くいの四、五人の人たちが声もたてずこつちも向むかず冷つめたくわりました。

ジヨバンニは何べんも眼めをぬぐいながら活字かつじをだんだんひろいました。

六時むがうつてしばらくたつたころ、ジヨバンニは拾ひろつた活字かつじをいっぱいに入いれた平ひらたい箱はこをもういちど手にもつた紙きれと引き合わせてから、さっきの卓子テーブルの人へ持もつて来ました。その人は黙だまつてそれを受け取とつてかすかにうなずきました。

ジヨバンニはおじぎをすると扉とびらをあけて計算台けいさんだいのところに来きました。すると白服しろふくを着きた人がやつぱりだまって小さな銀貨ぎんかを一つジヨバンニに渡わたしました。ジヨバンニはにわか顔かほいろがよくなつて威勢いせいよくおじぎをすると、台おの下したに置おいた靴かばんをもつておもてへ飛とびだしました。それから元氣げんきよく口笛くちぶえを吹ふきながらパン屋やへ寄よつて

パンの塊かたまりを一つと角砂糖かくざとうを一袋ふくろ買いますといちもくさんに走りだしました。

三 家

ジョバンニが勢いきおいよく帰って来たのは、ある裏町うらまちの小さな家でした。その三つならんだ入口のいちばん左側ひだりがわには空箱あきばこに紫むらさきいろのケールやアスパラガスが植うえてあつて小さな二つの窓まどには日覆ひおおいがおりたままになっていました。

「お母さん、いま帰ったよ。ぐあい悪わるくなかったの」ジョバンニは靴くつをぬぎながら言いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事しごとがひどかったらう。今日は涼きょうしくてね。わたしはずうつとぐあいがいいよ」

ジョバンニは玄関げんかんを上あがって行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口へやの室むろに白い巾きんをかぶつて寝やすんでいたのでした。ジョバンニは窓まどをあけました。

「お母さん、今日は角砂糖かくざとうを買かってきたよ。牛ぎゅう乳にゅうに入れてあげようと思って」

「ああ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから」

「お母さん。姉さんねえはいつ帰ったの」

「ああ、三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね」

「お母さんの牛ぎゆうにゆう乳は来ていないだろうか」

「来なかったろうかねえ」

「ぼく行つてとつて来よう」

「ああ、あたしはゆっくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんねえがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ」

「ではぼくたべよう」

ジョバンニは窓のまじところからトマトの皿さじをとつてパンといっしょにしばらくむしやむしやたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつとまもなく帰つてくると思うよ」

「ああ、あたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの」

「だって今朝けさの新聞に今年けさは北の方りようの漁りようはたいへんよかったと書いてあつたよ」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へはいるようなそんな悪いことをしたはずがないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかいの角だの今だつてみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかわるがわる教室へ持つて行くよ」

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ」

「みんながぼくにあうとそれを言うよ。ひやかすように言うんだ」

「おまえに悪口を言うの」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して言わない。カムパネルラはみんながそんなことを言うときはきのどくそうにしているよ」

「カムパネルラのお父さんとうちのお父さんとは、ちようどおまえたちのように小さいときからのお友達だったそうだよ」

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかつたなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄

った。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があったんだ。レールを七つ組み合わせるとまるくなつてそれに電柱や信号標もついていて信号標のあたりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、缶がすっかりすすけたよ」

「そうかねえ」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家じゅうまだしいんとしているからな」

「早いからねえ」

「ザウエルという犬がいるよ。しつぽがまるで箒のようだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうつと町の角までついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜のあかりを川へながしに行くんだって。きつと犬もついて行くよ」

「そうだ。今晚は銀河のお祭りだねえ」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ」

「ああ行つておいで。川へははいらないでね」

「ああほく岸きしから見るだけなんだ。一時間で行つてくるよ」

「もつと遊あそんでおいで。カムパネルラさんといっしょなら心配しんぱいはないから」

「ああきつといっしょだよ。お母さん、窓をしましておこうか」

「ああ、どうか。もう涼すずしいからね」

ジョバンニは立つて窓をしましめ、お皿おひらやパンの袋ふくろをかたづけると勢いきおいよく靴くつをは

いて、

「では一時間半はんで帰つてくるよ」と言いいながら暗くらい戸口とぐちを出しました。

四 ケンタウル祭さいの夜

ジョバンニは、口笛くちぶえを吹ふいているようなさびしい口つきで、檜ひのきのまつ黒くろにならんだ町の坂さかをおりて来たのでした。

坂さかの下したに大きな一つの街燈がいとうが、青白あざく立派りっぱに光ひかりつて立たっていました。ジョバンニ

が、どんどん電燈でんとうの方へおりて行きますと、いままでばけもののように、長くぼんやり、うしろへ引いていたジョバンニの影かげぼうしは、だんだん濃こく黒くはつきりなつて、足をあげたり手を振ふったり、ジョバンニの横よこの方へまわつて来るのでした。(ぼくは立派りっぱな機関車きかんしゃだ。ここは勾配こうばいだから速はやいぞ。ぼくはいまその電燈でんとうを通り越こす。そうら、こんどはぼくの影法師かげほうしはコンパスだ。あんなにくるつとまわつて、前の方へ来た)

とジョバンニが思いながら、大股おおまたにその街燈がいとうの下を通り過すぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新しいえりのとがったシャツを着きて、電燈でんとうの向むこう側がわの暗くらい小路こうじから出て来て、ひらつとジョバンニとすれちがいました。

「ザネリ、鳥瓜からすうりながしに行くの」ジョバンニがまだそう言いつてしまわないうちに、「ジョバンニ、お父さんから、ラッコの上着うわぎが来るよ」その子が投なげつけるようにうしろから叫さけびました。

ジョバンニは、ぱつと胸むねがつめたくなり、そこらじゅうきいと鳴るように思おもいました。

「なんだい、ザネリ」とジョバンニは高く叫び返しましたが、もうザネリは向こうのひばの植わった家の中へはいつていました。

（ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを言うのだろう。走るときはまるで鼠のようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを言うのはザネリがばかなからだ）

ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまざまの灯や木の枝で、すっかりきれいに飾られた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石でこさえたふくろうの赤い眼が、くるつくるつとうごいたり、いろいろな寶石が海のような色をした厚い硝子の盤に載って、星のようにゆくり循環ったり、また向こう側から、銅の人馬がゆつくりこつちへまわって来たりするのでした。そのまん中にまるい黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。

ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですが、その日と時間

に合あわせて盤ばんをまわすと、そのとき出ているそらがそのまま楕だ円えん形けいのなかにくぐつてあらわれるようになっており、やはりそのまん中には上から下へかけて銀ぎん河ががぼうとけむったような帯おびになって、その下の方ではかすかに爆ばく発はつして湯ゆげでもあげているように見えるのでした。またそのうしろには三本の脚あしのついた小さな望ぼう遠えん鏡きやうが黄わういろに光くわつて立たつていましたし、いちばんうしろの壁かべには空くうじゆうの星せい座ざをふしけものぎな獸へびや蛇へびや魚うしや瓶びんの形けいに書かいた大きな図ずがかかっています。ほんとうにこんなような蠍さそりだの勇ゆう士しだのそらにぎっしりいるだろうか、ああぼくはその中をどこまでも歩いてみたいと思おもつてたりしてしばらくほんやり立たつていました。

それからにわかにお母おさんの牛ぎゆう乳にゅうのこを思おもいだしてジヨバンニはその店みせをはなれました。

そしてきゆうくつな上う着わきの肩かたを氣きにしながら、それでもわざと胸むねを張はつて大きく手てを振ふつて町まちを通とおつて行いきました。

空氣くわは澄すみきつて、まるで水みづのように通とおりや店みせの中なかを流ながれましたし、街がい燈とうはみなまつ青あおなもみや檜ひのの枝えだで包つつまれ、電でん氣き會かい社しゃの前まへの六む本ぼんのププララタタナスの木きなどは、中

にたくさんまめでんとうの豆電燈がついて、ほんとうにそこらは人魚の都みやこのように見えるのでした。子どもらは、みんな新しい折おりのついた着物きものを着きて、星めぐりの口笛くちふえを吹ふいたり、「ケンタウルス、露つゆをふらせ」と叫さけんで走ったり、青いマグネシヤの花火もを燃もしたりして、たのしそうに遊あそんでいたのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首くびをたれて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考えながら、牛乳屋ぎゅうやの方いそへ急いそぐのです。

ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本いくほんも幾本いくほんも、高く星ぞらに浮うかんでいるところに来ていました。その牛乳屋ぎゅうやの黒い門もんをはいり、牛うしのおいにするうすくらい台所だいどころの前に立たって、ジョバンニは帽子ぼうしをぬいで、

「今晚こんばんは」と言いいましたら、家の中はしいんとして誰だれもいたようではありませんでした。

「今晚こんばんは、ごめんなさい」ジョバンニはまっすぐに立たってまた叫さけびました。するとしばらくたってから、年とった女むすめの人が、どこかぐあいが悪いわるようにそろそろと出て来て、何か用かと口くちの中で言いいました。

「あの、今日、牛ぎゆう乳にゆうが僕ぼくんとこへ来きなかつたので、もらいにあがつたんです」ジヨバンニが一生めいけん命いきお勢いきおいよく言いいました。

「いま誰だれもいないでわかりません。あしたにしてください」その人は赤めい眼めの下のとこをこすりながら、ジヨバンニを見おろして言いいました。

「おつかさんが病びよう気きなんですから今晩こんばんでないと困こまるんです」

「ではもう少すくしたってから来てください」その人はもう行いってしまいそうでした。

「そうですね。ではありがとう」ジヨバンニは、お辞じ儀ぎをして台だい所じやうから出でました。

十字じゅうじになつた町まちのかどを、まがろうとしましたら、向むここの橋はしへ行く方かたの雜貨店ざっかてんの前まへで、黒くろい影かげやぼんやり白しろいシヤツが入いり乱みだれて、六む、七しち人の生徒せいとらが、口笛くちぶえを吹ふいたり笑わらつたりして、めいめい烏からす瓜うりの燈火あかりを持もつてやくつて来くるのを見みました。その笑わらい声こゑも口笛くちぶえも、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジヨバンニの同級どうききゆうの子供こどもらだつたのです。ジヨバンニは思おもわずどきつとして戻もどろうとしましたが、思おもい直なおして、いっそう勢いきおいよくそつちへ歩いいて行いきました。

「川かわへ行くの」ジヨバンニが言いおうとして、少すくしのどがつまつたように思おもつたとき、

「ジョバンニ、ラッコの上着うわぎが来るよ」さっきのザネリがまた叫さけびました。

「ジョバンニ、ラッコの上着うわぎが来るよ」すぐみんなが、続つづいて叫さけびました。ジョバンニはまっ赤になつて、もう歩いてゐるかもわからず、急いそいで行きすぎようとしましたら、そのなかにカムパネルラがいたのです。カムパネルラはきのどくそうに、だまつて少しわらつて、おこらないだろうかというようにジョバンニの方を見ていました。

ジョバンニは、にげるようにその眼めを避さけ、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過すぎて行つてまもなく、みんなはてんでに口笛くちふえを吹ふきました。町かどを曲まがるとき、ふりかえつて見ましたら、ザネリがやはりふりかえつて見ていました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛くちふえを吹ふいて向むこうにぼんやり見える橋はしの方へ歩いて行つてしまつたのです。ジョバンニは、なんとも言いえずさびしくなつて、いきなり走りだしました。すると耳みみに手をあてて、わあわあと言いいながら片足かたあしでびよんぴよん跳とんでいた小さな子供こどもらは、ジョバンニがおもしろくてかけるのだと思つて、わあいと叫さけびました。

まもなくジョバンニは走りだして黒い丘の方へ急ぎました。

五 天気輪の柱

牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下に、ほんやりふだんよりも低く、連なつて見えました。

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんどんのぼって行きました。まっくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らされたのでした。草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もいて、ある葉は青くすかし出され、ジョバンニは、さつきみんなの持つて行つた烏瓜のあかりのようだとも思いました。

そのまっ黒な、松や檜の林を越えようと、にわかにならんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ互つているのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わけられたのでした。つりがねそうか野ぎくかの花が、そこらいちめん、夢の中からで

もかおりだしたというように咲き、鳥が一疋、丘の上を鳴き続けながら通って行き
ました。

ジヨバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい
草に投げました。

町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのようにともり、子供らの歌う
声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞こえて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘
の草もしずかにそよぎ、ジヨバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷やされました。

野原から汽車の音が聞こえてきました。その小さな列車の窓は、一列小さく赤く見
え、その中にはたくさんの旅人が、苹果をむいたり、わらったり、いろいろなふう
にしていると考えますと、ジヨバンニは、もうなんとも言えずかなしくなつて、ま
た眼をそらに挙げました。

(この間原稿五枚分なし)

ところがいくから見ても、そのそらは、ひる先生の言ったような、がらんとし
た冷たいとこだとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そ

こは小さな林や牧場ほくじょうやらある野原のはらのように考えられてしかたなかったのです。そしてジョバンニは青い琴ことの星が、三つにも四つにもなつて、ちらちらまたたき、脚あしが何べんも出たり引つ込んだりして、とうとう草きのこのように長く延びるのを見ました。またすぐ眼めの下めのまちまでが、やっぱりほんやりしたたくさんの星の集まりあつか一つの大きなけむりかのように見えるように思いました。

六 銀河ぎんがステーション

そしてジョバンニはすぐうしろの天気輪てんきりんの柱はしらがいつかぼんやりした三角標さんかくひょうの形になつて、しばらく蛍ほたるのように、ぺかぺか消えたりともつたりしているのを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃い鋼はがねの野原はがねにたちました。いま新しく灼やいたばかりの青い鋼はがねの板いたのような、その野原に、まっすぐにすきつと立ったのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ぎんがステーション、銀河ぎんがステーションと言いう声

がしたと思うと、いきなり眼の前が、ぱつと明るくなって、まるで億万の螢鳥賊の火を一ぺんに化石させて、そらじゆうに沈めたというぐあい、またダイヤモンド会社で、ねだんがやすくならないために、わざと穫れないふりをして、かくしておいた金剛石を、誰かがいきなりひっくりかえして、ばらまいたというふうに、眼の前がさあつと明るくなって、ジョバンニは、思わず何べんも眼をこすってしまいました。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのでした。ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のなんだ車室に、窓から外を見ながらすわっていたのです。車室の中は、青い天鵞絨を張った腰掛けが、まるでがらあきで、向こうの鼠いろのワニスを塗った壁には、真鍮の大きなぼたんが二つ光っているのです。

すぐ前の席に、ぬれたようにまっ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気がつきました。そしてそのこどもの肩のあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰だかわかりた

くて、たまらなくなりました。いきなりこつちも窓から顔を出そうとしたとき、にわかはその子供が頭を引つ込めて、こつちを見ました。

それはカムパネルラだったのです。ジヨバンニが、

カムパネルラ、きみは前からここにいたの、と言おうと思ったとき、カムパネルラが、

「みんなはね、ずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった」と言いました。

ジヨバンニは、

(そうだ、ぼくたちはいま、いっしょにさそって出かけたのだ)とおもいながら、「どこかで待っているよ」と言いました。するとカムパネルラは、

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎いにきたんだ」

カムパネルラは、なぜかそう言いながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいというふうでした。するとジヨバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるというような、おかしな気持ちが出来てしまいました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直って、勢いよく言いました。

「ああしまった。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれどかまわない。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんとうにすきだ。川の遠くを飛んでいたって、ぼくはきつと見える」

そして、カムパネルラは、まるい板のようになった地図を、しきりにぐるぐるまわして見ていました。まったく、その中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどって行くのでした。そしてその地図の立派なことは、夜のようにまっ黒な盤の上に、一々の停車場や三角標、泉水や森が、青や橙や緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。

ジョバンニはなんだかその地図をどこかで見たようにおもいました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ」

ジョバンニが言いました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらわなかったの」

「ああ、ぼく銀河ステーションを通つたらうか。いまぼくたちのいるところ、ここだろ。」

ジヨバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。

「そうだ。おや、あの河原は月夜だらうか」そつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられうごいて、波を立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ」ジヨバンニは言いながら、まるでね上がりたくらい愉快になって、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生けん命延びあがって、その天の川の水を、見きわめようとしましたが、はじめはどうしてもそれが、はつきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおつて、ときどき眼のかげんか、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のようにぎらっと光つたりしながら、声もなくどんどん流れて行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐光の三角標が、うつくしく立っていたのです。遠いものは小

さく、近いものは大きく、遠いものは橙だいだいや黄いろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、あるいは三角形さんかくけい、あるいは四辺形しへんけい、あるいは電いなすまや鎖くさりの形、さまざまにならんで、野原いっぱいに光っているのです。ジヨバンニは、まるできどきして、頭をやけに振りふりました。するとほんとうに、そのきれいな野原のほらじゅうの青や橙だいだいや、いろいろかがやく三角標さんかくひょうも、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり顫ふるえたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に来た」ジヨバンニは言いいました。

「それに、この汽車石炭せきたんをたいていないねえ」ジヨバンニが左手をつき出して窓まどから前の方を見ながら言いいました。

「アルコールか電気だろう」カムパネルラが言いいました。

するとちやうど、それに返事へんじするように、どこか遠くの遠くのもやのもやの中から、セロのようなごうごうした声こゑがきこえて来きました。

「この汽車は、ステイムや電気でごうごうしていない。ただうごくようにきまつているからうごいているのだ。ごごと音をたてていると、そうおまえたちは思おもつて

いるけれども、それはいままで音をたてる汽車にばかりなれているためなのだ」

「あの声、ほくなんべんもどこかできた」

「ぼくだって、林の中や川で、何べんも聞いた」

ごとごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そらのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青じろい微光の中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。

「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ」カムパネルラが、窓の外を指さして言いました。

線路のへりになったみじかい芝草の中に、月長石でも刻まれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました。

「ぼく飛びおりに、あいつをとって、また飛び乗ってみせようか」ジヨバンニは胸をおどらせて言いました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまったから」

カムパネルラが、そう言ってしまうかしまわないうち、次のりんどうの花が、い

つばいに光って過ぎて行きました。

と思ったら、もう次から次から、たくさんのきいろな底をもったりんどうの花の
 コップが、湧くように、雨のように、眼の前を通り、三角標の列は、けむるように燃
 えるように、いよいよ光って立ったのです。

七 北十字とプリオシン海岸

「おつかさんは、ぼくをゆるしてくださいさるだろうか」

いきなり、カムパネルラが、思い切ったというように、少しどもりながら、せき
 こんで言いました。

ジヨバン二は、

（ああ、そうだ、ぼくのおつかさんは、あの遠い一つのちりのように見える 橙い
 ろの三角標のあたりにいらっしやって、いまぼくのことを考えているんだった）と
 思いながら、ほんやりしてだまっていました。

「ぼくはおつかさんが、ほんとうに幸さいわいになるなら、どんなことでもする。けれど、いったいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸さいわいなんだろう」カムパネルラは、なんだか、泣なきだしたいのを、一生けん命めいこらえているようでした。

「きみのおつかさんは、なんにもひどいことないじゃないの」ジヨバンニはびつくりして叫さけびました。

「ぼくわからない。けれども、誰だれだって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸さいわいなんだねえ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるしてくださると思う」カムパネルラは、なにかほんとうに決心けっしんしているように見えました。

にわかに、車のなかが、ぱつと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、金剛石こんごうせきや草の露つゆやあらゆる立派りっぱさをあつめたような、きらびやかな銀河ぎんがの河床かわせじの上を、水は声もなくかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼうつと青白く後光ごこうの射さした一つの島しまが見えるのでした。その島しまの平たいらなただきに、立派りっぱな眼めもさめるような、白い十字架じゅうじかがたって、それはもう、凍こおった北極ほっきょくの雲いで鑄いたといったらいいか、すきつとした金いろの円光えんこうをいただいて、しずかに永久えいきゅうに立たっているのです。

「ハレルヤ、ハレルヤ」前からもうしろからも声こゑが起おこりました。ふりかえって見ると、車室の中の旅人たびびとたちは、みなまっすぐにきものひだを垂たれ、黒いバイブルを胸むねにあてたり、水晶すいしょうの数珠じゆずをかけたたり、どの人もつましく指ゆびを組み合わせて、そつちに祈いのっているのです。思おもわず二人ふたりともまっすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬ほおは、まるで熟じゆくした苹果りんごのあかしのようにつくしくかがやいて見えませんでした。

そして島しまと十字架じゆうじかとは、だんだんうしろの方かたへうつって行いきました。

向むこう岸ぎしも、青じろくぼうつと光ひかりってけむり、時々、やつぱりすすきが風にひるがえるらしく、さつとその銀ぎんいろがけむって、息いきでもかけたように見え、また、たくさんのりんどうの花はなが、草くさをかくれたり出でたりするのは、やさしい狐火きつねびのように思おもわれました。

それもほんのちよつとの間ま、川かわと汽車くるまとの間は、すすきの列れつでさえぎられ、白鳥しるべの島しまは、二度どばかり、うしろの方かたに見みえましたが、じきもうずうつと遠とほく小さく、絵えのようになつてしまい、またすすきがざわざわ鳴なって、とうとうすっかり見えなく

なつてしまいました。ジョバンニのうしろには、いつから乗つていたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリックふうの尼さんが、まんまるな緑の瞳を、じつとまっすぐに落として、まだ何かことばか声かが、そつちから伝わつて来るのを、虔んで聞いているというように見えました。旅人たちはしずかに席に戻り、二人も胸いっばいのかなしみに似た新しい気持ち、何気なくちがった語で、そつと談話合つたのです。

「もうじき白鳥の停車場だねえ」

「ああ、十一時かつきりには着くんだよ」

早くも、シグナルの緑の燈と、ぼんやり白い柱とが、ちらつと窓のそとを過ぎ、それから硫黄のほのおのようなくらいほんやりした転つ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかになつて、まもなくプラットホームの前列の電燈が、うつくしく規則正しくあらわれ、それがだんだん大きくなつてひろがつて、二人はちやうど白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

さわやかな秋の時計の盤面には、青く灼かれたはがねの二本の針が、くつきり十

一時を指さしました。みんなは、一ぺんにおりて、車室の中はがらんとなくなつてしまいました。

〔二十分停車〕と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか」ジヨバンニが言いいました。

「降りよう」二人は一度にはねあがつてドアを飛び出して改札口へかけて行きました。ところが改札口には、明るい紫むらさがかつた電燈でんとうが、一つ点ついているばかり、誰もいませんでした。そこらじゅうを見ても、駅長えきまちやうや赤帽あかぼうらしい人の、影かげもなかつたのです。

二人は、停車場ていしやばの前の、水晶細工すいしやうざいくのように見える銀杏いちょうの木きに囲かこまれた、小さな広場ひろばに出でました。

そこから幅はばの広いみちが、まっすぐに銀河ぎんがの青光あおびかりの中へ通とおつていました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行いつたか一人も見えませんでした。二人がその白い道かたを、肩かたをならべて行いきますと、二人の影かげは、ちやうど四方ふたに窓まどのある室へやの中の、二本の柱はしらの影かげのように、また二つの車輪しゃりんの輻やのように幾本いくほんも幾本いくほんも四方へ出

るのでした。そしてまもなく、あの汽車から見えたきれいな河原かわらに来ました。

カムパネルラは、そのきれいな砂すなを一つまみ、掌てのひらにひろげ、指ゆびできしきしさせながら、夢ゆめのように言いっているのです。

「この砂すなはみんな水晶すいしょうだ。中で小さな火かが燃もえている」

「そうだ」どこでぼくは、そんなことを習ならったろうと思おもいながら、ジョバンニもぼんやり答こたえていました。

河原かわらの礫こいしは、みんなすきとおって、たしかに水晶すいしょうや黄玉トパーズや、またくしゃくしゃの皺しゅうきよく 曲まがをあらわしたのや、また稜かどから霧きりのような青白い光ひかりを出す鋼玉コランダムやらでした。ジョバンニは、走はしってその渚なみに行いって、水みづに手をひたしました。けれどもあやしいその銀河ぎんがの水みづは、水素すいそよりもっとすきとおっていたのです。それでもたしかに流ながれていたことは、二人ふたりの手首てくびの、水みづにひたつたところが、少し水銀すいぎんいろに浮ういたように見え、その手首てくびにぶつかってできた波なみは、うつくしい燐光りんこうをあげて、ちらちらと燃もえるように見えたのでわかりました。

川上がわの方かたを見ると、すすきのいっぱいにはえている崖がけの下したに、白い岩いわが、まるで

運動場のように平らに川に沿って出ているのでした。そこに小さな五、六人の人が、何か掘り出すか埋めるかしているらしく、立ったりかがんだり、時々なにかの道具が、ピカッと光ったりしました。

「行ってみよう」二人は、まるで一度に叫んで、そっちの方へ走りました。その白い岩になったところの入口に、「プリオシン海岸」という、瀬戸物のつるつるした標札が立って、向こうの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ」カムパネルラが、不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきのとがったくるみの実のようなものをひろいました。

「くるみの実だよ。そら、たくさんある。流れて来たんじゃない。岩の中にはいつてるんだ」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない」

「早くあすこへ行ってみよう。きっと何か掘ってるから」

二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさっきの方へ近よって行

きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻でこさえたようなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近づいて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、つるはしをふりあげたり、スコップをつかったりしている、三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をしていました。

「そのその突起をこわさないように、スコップを使いたまえ、スコップを。おつと、もし遠くから掘つて。いけない、いけない、なぜそんな乱暴をするんだ」

見ると、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れてつぶれたというふうになって、半分以上掘り出されてきました。そして気をつけて見ると、そこらには、蹄の二つある足跡のついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

「君たちは参観かね」その大学士らしい人が、眼鏡をきらっとさせて、こつちを見て話しかけました。

「くるみがたくさんあったろう。それはまあ、ざつと百二十年まんねんぐらい前のくるみだよ。ごく新しい方かたさ。ここは百二十年まんねん前、第三紀だいさんきのあところは海岸かいがんでね、この下からは貝かいがらも出る。いま川の流れているところに、そつくり塩水しおみずが寄せたり引いたりもしていたのだ。このけものかね、これはボスといつてね、おいおい、そこ、つるはしはよしたまえ。ていねいに鑿のみでやつてくれたまえ。ボスといつてね、いまの牛うしの先祖せんぞで、昔むかしはたくさんいたのさ」

「標本ひょうほんにするんですか」

「いや、証明しょうめいするに要いるんだ。ほくらからみると、ここは厚あつい立派りっぱな地層ちそうで、百二十年まんねんぐらい前にできたという証拠しょうこもいろいろあがるけれども、ほくらとちがつたやつからみてもやつぱりこんな地層ちそうに見えるかどうか、あるいは風か水や、がらんとした空かに見えやしないかということなのだ。わかつたかい。けれども、おいおい、そこもスコップではいけない。そのすぐ下に肋骨ろっこつが埋うもれてるはずじゃないか」

大学士だいがくしはあわてて走はしって行いきました。

「もう時間じかんだよ。行いこう」カムパネルラが地図ちずと腕時計うでとけいとをくらべながら言いいまし

た。

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします」ジヨバンニは、ていねいに大学士におじぎしました。

「そうですか。いや、さよなら」大学士は、また忙しそうに、あちこち歩きまわって監督をはじめました。

二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないように走りまわりました。そしてほんとうに、風のように走れたのです。息も切れず膝もあつくありませんでした。

こんなにしてかけるなら、もう世界じゅうだつてかけれると、ジヨバンニは思いました。

そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなって、まもなく二人は、もとの車室の席にすわっていま行って来た方を、窓から見えました。

八 鳥を捕る人

「ここへかけてもようございますか」

がさがさした、けれども親切そうな、大人の声が、二人のうしろで聞こえました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外套を着て、白い巾でつつんだ荷物を、二つに分けて肩に掛けた、赤髯のせなかのかがんだ人でした。

「ええ、いいんです」ジヨバンニは、少し肩をすぼめてあいさつしました。その人は、ひげの中でかすかに微笑いながら荷物をゆっくり網棚にのせました。ジヨバンニは、なにかたいへんさびしいようなかなしいような気がして、だまって正面の時計を見ていましたら、ずうつと前の方で、硝子の笛のようなものが鳴りました。汽車はもう、しずかにうごいていたのです。カムパネルラは、車室の天井を、あちこち見ていました。その一つのあかりに黒い甲虫がとまって、その影が大きく天井にうつっていたのです。赤ひげの人は、なにかなつかしそうにわらいながら、ジヨバンニやカムパネルラのようすを見ていました。汽車はもうだんだん早くなって、す

すきと川と、かわるがわる窓の外から光りました。

赤ひげの人が、少しおずおずしながら、二人に訊きました。

「あなた方は、どちらへいらっしゃるんですか」

「どこまでも行くんです」ジヨバンニは、少しきまり悪そうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、じっさい、どこまでも行きますぜ」

「あなたはどこへ行くんです」カムパネルラが、いきなり、喧嘩のようにたずねましたので、ジヨバンニは思わずわらいました。すると、向こうの席にいた、とがった帽子をかぶり、大きな鍵を腰に下げた人も、ちらっとこつちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑いだしてしまいました。ところがその人は別におこつたでもなく、頬をびくびくしながら返事をしました。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね」

「何鳥ですか」

「鶴や雁です。さぎも白鳥もです」

「鶴はたくさんいますか」

「いますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかったのですか」

「いいえ」

「いまでも聞こえるじゃありませんか。そら、耳をすまして聴いてごらんさい」

二人は眼を挙げ、耳をすましました。ごごとと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くような音が聞こえて来るのでした。

「鶴、どうしてとるんですか」

「鶴ですか、それとも鷺ですか」

「鷺です」ジヨバンニは、どっちでもいいと思いつながら答えました。

「そいつはな、雑作ぞうさない。さぎというものは、みんな天の川の砂すなが凝かたまって、ぼおつとできるもんですからね、そして始終しじゅう川へ帰りますからね、川原で待つまっていて、鷺さぎがみんな、脚あしをこういうふうにしておりてくるところを、そいつが地べたへつくつかつかないうちに、びたつと押おえちまうんです。するともう鷺さぎは、かたまつて安心あんしんして死しんじまいます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押おし葉はにするだけです」

「鷺さぎを押おし葉はにするんですか。標本ひょうほんですか」

「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか」

「おかしいねえ」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいも不審もありませんや。そら」その男は立って、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまとつて来たばかりです」

「ほんとうに鷺だねえ」二人は思わず叫びました。まっ白な、あのさっきの北の十字架のように光る鷺のからだだが、十ばかり、少しひらべったくなつて、黒い脚をちぢめて、浮彫りのようにならんでいたのです。

「眼をつぶってるね」カムパネルラは、指でそつと、鷺の三日月がたの白いつぶつた眼にさわりました。頭の上の槍のような白い毛もちゃんといっていました。

「ね、そうですね」鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくると包んで紐でくくりました。誰がいったいこころで鷺なんぞたべるだろうとジヨバンニは思いながら訊きました。

「鷺はおいしいんですか」

「ええ、毎日注文があります。しかし雁の方が、もつと売れます。雁の方がずつと柄がいいし、第一手数がありませんからな。そら」鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じろとまだらになって、なにかのあかりのようにひかる雁が、ちようどさつきの鷺のように、くちばしをそろえて、少しひらべったくなくなって、ならんでいました。

「こつちはすぐたべられます。どうです、少しおあがりなさい」鳥捕りは、黄いろの雁の足を、軽くひっぱりました。するとそれは、チヨコレートでもできていますように、すつときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべてごらんなさい」鳥捕りは、それを二つにちぎってわたししました。ジヨバンニは、ちよつとたべてみて、

（なんだ、やつぱりこいつはお菓子だ。チヨコレートよりも、もつとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかそこの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、たいへんきのどくだ）とおもいながら、やつぱりぼくぼくそれをたべていました。

「も少しおあがりなさい」鳥捕りがまた包みを出しました。ジヨバンニは、もつとたべたかったのですけれども、

「ええ、ありがとう」といつて遠慮しましたら、鳥捕りは、こんどは向こうの席の、鍵をもつた人に出しました。

「いや、商売ものもらつちやすみませんな」その人は、帽子をとりました。

「いいえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥の景気は」

「いや、すてきなもんですよ。一昨日の第二限ころなんか、なぜ燈台の灯を、規則以外に間（一時空白）させるかつて、あつちからもこつちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こつちがやるんじゃないやなくて、渡り鳥どもが、まっ黒にかたまつて、あかしの前を通るのですからしかたありませんや、わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのとこへ持つて来たつてしかたがねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方もなく細い大将へやれつて、こう言つてやりましたがね、はつは」

すすきがなくなつたために、向こうの野原から、ぱつとあかりが射して来ました。「鷺の方はなぜ手数なんですか」カムパネルラは、さつきから、訊こうと思つてい

たのです。

「それはね、鷺さぎをたべるには」鳥捕とりとりは、こつちに向むき直なおりました。「天の川の水あかりに、十日もつるしておくかね、そうでなけあ、砂すなに三、四日うずめなけあいけななんだ。そうすると、水銀すいぎんがみんな蒸発じょうはつして、たべられるようになるよ」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子かしでしょう」やっぱりおなじことを考えていたとみえて、カムパネルラが、思い切ったというように、尋たずねました。鳥捕とりとりは、何かたいへんあわてたふうで、

「そうそう、ここで降りおりなけあ」と言いいながら、立たって荷物にもつをとつたと思うと、もう見えなくなっていました。

「どこへ行いったんだろう」二人ふたりは顔を見合わせましたら、燈台守とうだいもりは、にやにや笑わらつて、少し伸のびあがるようにしながら、二人の横よこの窓まどの外そとをのぞきました。二人もそつちを見ましたら、たつたいまの鳥捕とりとりが、黄いろと青じろの、うつくしい燐光りんこうを出です、いちめんのかわらははこぐさの上に立たって、まじめな顔をして両手りょうてをひろげて、じつとそらを見ていたのです。

「あすこへ行つてる。ずいぶん奇体だねえ。きつとまた鳥をつかまえるとこだねえ。汽車が走つて行かないうちに、早く鳥がおけるといいな」と言つたとたん、がらんとした桔梗いろの空から、さつき見たような鷺が、まるで雪の降るように、ぎやあぎやあ叫びながら、いっぱいに舞いおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すつかり注文通りだというようにほくほくして、両足をかつきり六十度を開いて立って、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片つぱしから押えて、布の袋の中に入れるのでした。すると鷺は、蛍のように、袋の中でしばらく、青くぺかぺか光つたり消えたりしていましたが、おしまいとうとう、みんなぼんやり白くなって、眼をつぶるのでした。ところが、つかまえられる鳥よりは、つかまえられないで無事に天の川の砂の上に降りるものの方が多かったです。それは見ていると、足が砂へつくや否や、まるで雪の解けるように、縮まってひらべつたくなって、まもなく溶鉱炉から出た銅の汁のように、砂や砂利の上にひろがり、しばらくは鳥の形が、砂についているのですが、それも二、三度明るくなったり暗くなったりしているうちに、もうすつかりまわりと同じいろになつてしまふのでした。

鳥捕りは、二十疋ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたって、死ぬときのような形をしました。と思つたら、もうそこに鳥捕りの形はなくなつて、かえつて、

「ああせいせいした。どうもからだにちようど合うほど稼いでいるくらい、いいことはありません」というききおぼえのある声が、ジョバンニの隣りにしました。見ると鳥捕りは、もうそこでとつて来た鷺を、きちんとそろえて、一つずつ重ね直しているのです。

「どうして、あすこから、いっぺんにここへ来たんですか」ジョバンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないような、おかしな気がして問いました。「どうしてつて、来ようとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか」

ジョバンニは、すぐ返事をしようと思ひましたけれども、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔をまっ赤にして何か思い出そうとしているのです。

「ああ、遠くからですね」鳥捕りは、わかつたというように雑作ぞうさなくうなずきましました。

九 ジョバンニの切符

「もうここらは白鳥区くのおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所かんそくじょです」

窓まどの外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物たてものが四棟むねばかり立って、その一つの平屋根ひらやねの上に、眼めもさめるような、青宝玉サファイアと黄玉トパーズの大きな二つのすきとおった球たまが、輪わになってしずかにくるとまわっています。黄いろのがだんだん向むこうへまわって行って、青い小さいのがこつちへ進すすんで来、まもなく二つのはじは、重かさなり合あって、きれいな緑みどりいろの両面凸りょうめんとつレンズのかわちをつくり、それもだんだん、まん中まんちゆうがふくらみだして、とうとう青いのは、すっかりトパーズの正しょうめん面に来きましたので、緑みどりの中心しんしんと黄いろな明ある環わとができま

した。それがまただんだん横へ外れて、前のレンズの形を逆にくり返し、とうとうすつとはなれて、サファイアは向こうへめぐり、黄いろのはこっちへ進み、またちようどさっきのようなふうになりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、睡っているように、しずかによこたわったのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……」鳥捕りが言いかけたとき、「切符を拜見いたします」三人の席の横に、赤い帽子をかぶったせいの高い車掌が、いつかまっすぐに立っていて言いました。鳥捕りは、だまってかくしから、小さな紙きれを出しました。車掌はちよつと見て、すぐ眼をそらして（あなたの方の？）というように、指をうごかしながら、手をジヨバンニたちの方へ出しました。

「さあ」ジヨバンニは困って、もじもじしていましたら、カムパネルラはわけもないうわぎ、小さな鼠いろの切符を出しました。ジヨバンニは、すっかりあわててしまって、もしか上着のポケットにでも、はいつていたかとおもいながら、手を入れてみましたら、何か大きなたたんだ紙きれにあたりました。こんなものはい

つていたろうかと思つて、急いで出してみましたら、それは四つに折つたはがきぐ
 らいの大きさの緑いろの紙でした。車掌が手を出しているもんですからなんでも
 かまわない、やつちまえと思つて渡しましたら、車掌はまっすぐに立ち直つてい
 ねいにそれを開いて見ていました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきり
 に直したりしていましたし燈台看守も下からそれを熱心にのぞいていましたから、
 ジョバンニはたしかにあれば証明書か何かだったと考へて少し胸が熱くなるような
 気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか」車掌がたずねました。

「なんだかわかりません」もう大丈夫だと安心しながらジョバンニはそつちを見あ
 げてくつくつ笑いました。

「よろしゅうございます。南十字へ着きますのは、次の第三時ころになります」車掌
 は紙をジョバンニに渡して向こうへ行きました。

カムパネルラは、その紙切れが何だったか待ちかねたというように急いでのでき
 こみました。ジョバンニも全く早く見たかったです。ところがそれはいちめん黒

い唐草からくさのような模様もようの中に、おかしな十ばかりの字を印刷いんさつしたもので、だまって見ているとなんだかその中へ吸すい込まれてしまうような気がするのです。すると鳥捕とりとりが横からちらつとそれを見てあわてたように言いいました。

「おや、こいつはたいしたもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符きつぷだ。天上どこじやない、どこでもかつてにあるける通行券つうこうけんです。こいつをお持ちになれば、なるほど、こんな不完全ふかんぜんな幻想げんそう第四次の銀河鉄道ぎんがてつどうなんか、どこまでも行けるはずでさあ、あなた方あなたたちたいしたもんですね」

「なんだかわかりません」ジヨバンニが赤くなつて答こたえながら、それをまたたんでかくしに入いれました。そしてきまりが悪いわるのでカムパネルラと二人ふたり、また窓まどの外とをながめていましたが、その鳥捕とりとりの時々ときどきたいしたもんだというように、ちらちらこつちを見ているのがぼんやりわかりました。

「もうじき鷺わしの停車場ていしやじょうだよ」カムパネルラが向むこう岸ぎしの、三つならんだ小さな青じろい三角標さんかくひょうと、地図ちずとを見くらべて言いいました。

ジヨバンニはなんだかわけもわからずに、にわかにとりの鳥捕とりとりがきのどくで

たまらなくなりました。鷺をつかまえてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびつくりしたように横目で見てあわててほめだしたり、そんなことを一々考えていると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジヨバンニの持っているものでも食べるものでもなんでもやっつけてしまいたい、もうこの人のほんとうの幸になるなら、自分があの光る天の川の河原に立って百年つづけて立って鳥をとつてやつてもいいというような気がして、どうしてももう黙っていられなくなりました。ほんとうにあなたのはしいものはいったい何ですかと訊こうとして、それではあんまり出し抜けだから、どうしようかと考えてふり返って見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りがいませんでした。網棚の上には白い荷物も見えなかったのです。また窓の外で足をふんばってそらを見上げて鷺を捕るしたくをしているのかと思つて、急いでそつちを見ましたが、外はいちめんのうつくしい砂子と白いすすきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかもどがった帽子も見えませんでした。

「あの人どこへ行つたらう」カムパネルラもほんやりそう言っていました。

「どこへ行ったろう。いったいどこでまたあうのだろう。僕は**ほく**どうしても少しあの**もの**に物を言わなかつたろう」

「ああ、僕も**ほく**そう思っているよ」

「僕はあの人**ほく**が邪魔なような気がしたんだ。だから僕は**ほく**たいへんつらい」ジヨバンニはこんなへんてこな気もちは、ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで言**い**つたこともないと思**い**ました。

「なんだか**りんご**の**りんご**のおいがする。僕**ほく**いま**りんご**のことを考えたためだろうか」カムパネルラが不思議**ふしぎ**そうにあたりを見まわしました。

「ほんとうに**りんご**の**りんご**のおいだよ。それから**のいばら**のおいもする」

ジヨバンニもそこらを見ましたがやっぱりそれは窓**まど**からでもはいつて来るらしいのでした。いま秋だから**のいばら**野茨の花のおいのはずはないとジヨバンニは思**い**ました。

そしたらにわか**かみ**にそこに、つやつやした黒い髪**かみ**の六つばかりの男の子が赤いジャケツのぼたんもかけず、ひどくびっくりしたような顔をして、がたがたふるえては

だして立っていました。隣りには黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年がいつぱいに風に吹かれていているけやきの木のような姿勢で、男の子の手をしっかりとひいて立っていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ」青年のうしろに、もひとり、十二ばかりの眼の茶いろな可愛らしい女の子が、黒い外套を着て青年の腕にすがって不思議そうに窓の外を見ているのでした。

「ああ、ここはランカシャイヤだ。いや、コンネクテカット州だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召されているのです」黒服の青年はよろこびにかがやいてその女の子に言いました。けれどもなぜかまた額に深く皺を刻んで、それにたいへんつかれていられる、無理に笑いながら男の子をジョバンニのとなりにすわらせました。それから女の子にやさしくカムパネラのとりの席を指さしました。女の子はすなおにそこへすわって、きちんと両手を組み合わせました。

「ぼく、おねえさんのとこへ行くんだよう」腰掛けたばかりの男の子は顔を変へんにして燈台看守とうだいかんしゅの向むこうの席せきにすわったばかりの青年に言いいました。青年はなんとも言いえず悲かなしそうな顔をして、じつとその子の、ちぢれたぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手りょうてを顔にあててしくしく泣ないてしまいました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事しごとがあるのです。けれどももうすぐあとからいらつしゃいます。それよりも、おつかさんはどんなに永ながく待まっていていらつしゃったでしょう。わたしの大事だいじなタダシはいまどんな歌をうたっているだろう、雪ゆきの降ふる朝にみんなと手をつないで、ぐるぐるにわとこのやぶをまわってあそんでいるだろうかと考えたり、ほんとうに待まって心配しんぱいしていらつしゃるんですから、早く行いって、おつかさんにお目にかかりましょうね」

「うん、だけど僕ぼく、船ふねに乗のらなけあよかつたなあ」

「ええ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派りっぱな川、ね、あすこはあの夏なつじゆう、ツイントル、ツイントル、リトル、スターをうたつてやすむとき、いつも窓まどからほんやり白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょ、

あんなに光っています」

泣いていた姉もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年は教えるようにそつと姉弟にまた言いました。

「わたしたちはもう、なんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないところを旅して、じき神さまのそこへ行きます。そこならもう、ほんとうに明るくておいがよくて立派な人たちでいっぱいです。そしてわたしたちの代わりにポートへ乗れた人たちは、きつとみんな助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元氣を出しておもしろくうたって行きましょう」青年は男の子のぬれたような黒い髪をなで、みんなを慰めながら、自分もだんだん顔いろがかがやいてきました。

「あなた方はどちらからいらっしゃったのですか。どうなすったのですか」
さっきの燈台看守がやっと少しわかったように青年にたずねました。青年はかすかにわらいました。

「いえ、氷山にぶつつかって船が沈みましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急

な用で二か月前、一足さきに本国へお帰りになったので、あとから発ったのです。私は大学へはいつていて、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちようど十二日目、今日か昨日のあたりです、船が氷山にぶつつかって一ぺんに傾きもう沈みかけました。月のあかりはどこかほんやりありましたが、霧が非常に深かったです。ところがボートは左舷の方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となつて、どうか小さな人たちを乗せてくださいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いて、そして子供たちのために祈ってくれました。けれどもそこからボートまでのところには、まだまだ小さな子どもたちや親たちやなんかいて、とても押しつける勇氣がなかつたのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思ひましたから前にいる子供らを押しつけようとしました。けれどもまた、そんなにして助けてあげるよりはこのまま神の御前にみんなで行く方が、ほんとうにこの方たちの幸福だとも思ひました。それからまた、その神にそむく罪はわたくしひとりですよってぜひとも助けてあげようと思ひました。けれども、ど

うしても見ているとそれができないのでした。子どもらばかりのボートの中へはなしてやって、お母さんが狂気きやうきのようにキスを送りお父さんがかなしいのをじつとこらえてまっすぐに立っているなど、とてももう腸はらわたもちぎれるようでした。そのうち船はもうずんずん沈しずみますから、私たちはかたまつて、もうすっかり覚悟かくごして、この人たち二人を抱だいて、浮かべるだけは浮かぼうと船の沈しずむのを待まっていました。誰だれが投げたかライフヴィが一つ飛とんで来こましたけれどもすべつてずうつと向むこうへ行いってしまった。私は一生けん命めいで甲板かんばんの格子こうしになつたとこをはなして、三人それにしつかりとりつきました。どこからともなく三〇六番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのときにわか
に大きな音がして私たちは水に落ち、もう渦うずにはいったと思おもいながらしつかりこの人たちをだいて、それからぼうつとしたと思おもつたらもうここへ来ていたのです。この方たちのお母さんは一昨年さくねん没なくなられました。ええ、ボートはきつと助たすかったに
ちがいありません、なにせよほど熟練じゆくれんな水夫すいふたちが漕こいで、すばやく船からはなれていましたから」

そこらから小さな嘆息たんそくやいのりの声が聞こえジョバンニもカムパネルラもいまま
で忘れていたいろいろのことをほんやり思い出して眼めが熱あつくなりました。

（ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかったらうか。その氷山ひょうざんの流
れる北のはての海で、小さな船に乗のって、風や凍りこおつく潮水しおみずや、はげしい寒ささむとた
たかって、たれかが一生けんめいはたらいっている。ぼくはそのひとにほんとうにき
のどくでそしてすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいっ
たいどうしたらいいのだろう）

ジョバンニは首くびをたれて、すっかりふさぎ込んでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただ
しいみちを進すすむ中ちゆうのできごとなら、峠とうげの上りも下りもみんなほんとうの幸福こうふくに近
づく一あしずつですから」

燈台守とうだいもりがなぐさめていました。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至いたるためにいろいろのかなしみもみんなおほしめしです」

青年が祈るようにそう答えました。

そしてあの姉弟はもうつかれてめいめいぐったり席によりかかつて睡っていました。さっきのあのはだしだった足にはいつか白い柔らかな靴をはいていたのです。

ごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進みました。向こうの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈のようでした。百も千もの大小さまざまな三角標、その大きなものの上には赤い点々をうった測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集まってぽおっと青白い霧のよう、そこからか、またはもつと向こうからか、ときどきさまざまの形のぼんやりした狼煙のようなものが、かわるがわるきれいな桔梗いろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとおった奇麗な風は、ばらののにおいでいっぱいでした。

「いかがですか。こういう苹果はおはじめてでしょう」向こうの席の燈台看守がいつか黄金と紅でうつくしくいろどられた大きな苹果を落とさないように両手で膝の上にかかえていました。

「おや、どっから来たのですか。立派ですねえ。ここらではこんな苹果ができるの

ですか」青年はほんとうにびっくりしたらしく、燈台看守の両手にかかえられた一
もりの苹果を、眼を細くしたり首をまげたりしながら、われを忘れてながめていま
した。

「いや、まあおとりください。どうか、まあおとりください」

青年は一つとつてジョバンニたちの方をちよつと見ました。

「さあ、向こうの坊ちゃんがた。いかがですか。おとりください」

ジョバンニは坊ちゃんといわれたので、すこししゃくにさわってだまっています
たが、カムパネルラは、

「ありがとうございます」

すると青年は自分でとつて一つずつ二人に送つてよこしましたので、ジョバンニ
も立つて、ありがとうございますと言いました。

燈台看守はやつと両腕があいたので、こんどは自分で一つずつ睡っている姉弟
の膝にそつと置きました。

「どうもありがとうございます。どこでできるのですか。こんな立派な苹果は」

青年はつくづく見ながら言いました。

「この辺あたりではもちろん農業のうぎょうはいたしますけれど、たいはいひとりではいいものができるような約束やくそくになつております。農業のうぎょうだつてそんなにはねはおれはしません。たいはい自分の望のぞむ種子たねさえ播まげばひとりではいんどんできます。米だつてパシフイック辺へんのように穀からもないし十倍ばいも大きくてにおいもいいのです。けれどもあなたがたのいらつしやる方かたなら農業のうぎょうはもうありません。苹果りんごだつてお菓子かしだつて、かすが少しもありませんから、みんなそのひとそのひとによつてちがつた、わずかのいかおりになつて毛けあなからちらけてしまうのです」

にわかに男の子がぼつちり眼めをあいて言いいました。

「ああほくいまお母つかさんの夢ゆめをみていたよ。お母つかさんがね、立派りっぱな戸棚とだなや本のあるとこにいてね、ぼくの方かたを見て手をだしてにこにこにこわらつたよ。ぼく、おつかさん。りんごをひろつてきてあげましようか、と言いつたら眼めがさめちやつた。ああここ、さっきの汽車くるまのなかだねえ」

「その苹果りんごがそこにあります。このおじさんにいただいたのですよ」青年せいねんが言いま

した。

「ありがとうおじさん。おや、かおるねえさんまだねてるねえ、ほくおこしてやろう。ねえさん。ごらん、りんごをもらったよ。おきてごらん」

姉あねはわらって眼めをさまし、まぶしそうに両手りょうてを眼めにあてて、それから苹果りんごを見ました。

男の子はまるでパイをたべるように、もうそれをたべていました。またせっかくむいたそのきれいな皮かわも、くるくるコルク抜きぬのような形かたちになって床ゆかへ落ちるまでの間まにはすうつと、灰はいいろに光ひかりつて蒸発じょうはつしてしまうのでした。

二人ふたりはりんごをたいせつにポケットにしまいました。

川下かわの向むこう岸ぎしに青く茂しげった大きな林はやしが見え、その枝えだには熟じゆくしてまっ赤あかに光ひかりる面白い実みがいっぱい、その林はやしのまん中に高い高い三角標さんかくひょうが立たって、森もりの中なかからはオーケストラベルやジロフォンにまじってなんとも言いえずきれいな音ねいろが、とけるように浸しみるように風かぜにつれて流ながれて来るのでした。

青年せいねんはぞくつとしてからだをふるうようにしました。

だまってその譜を聞いていると、そこらにいちめん黄いろや、うすい緑の明るいの原か敷物かがひろがり、またまっ白な蠟のような露が太陽の面をかすめて行くように思われました。

「まあ、あの鳥」カムパネルラのとりの、かおると呼ばれた女の子が叫びました。「からすでない。みんなかささぎだ」カムパネルラがまた何気なくしかるように叫びましたので、ジョバンニはまた思わず笑い、女の子はきまり悪そうにしました。まったく河原の青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱい列になつてとまってじつと川の微光を受けているのでした。

「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛がぴんと延びてますから」青年はとりなすように言いました。

向こうの青い森の中の三角標はすっかり汽車の正面にきました。そのとき汽車のずうつとうしろの方から、あの聞きなれた三〇六番の讃美歌のふしが聞こえてきました。よほどの人数で合唱しているらしいのでした。青年はさっと顔いろが青ざめ、たつて一ぺんそっちへ行きそうにしましたが思いかえしてまたすわりました。

かおる子はハンケチを顔にあててしまいました。

ジョバンニまでなんだか鼻が変になりました。けれどもいつともなく誰ともなくその歌は歌い出されだんだんはつきり強くなりました。思わずジョバンニもカムパネルラもいつしよにうたいだしたのです。

そして青い橄欖の森が、見えない天の川の向こうにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行ってしまい、そこから流れて来るあやしい楽器の音も、もう汽車のひびきや風の音にすりへらされてずうつとかすかになりました。

「あ、孔雀がいるよ。あ、孔雀がいるよ」

「あの森琴の宿でしょう。あたしきつとあの森の中にむかしの大きなオーケストラの人たちが集まっていらっしやると思うわ、まわりには青い孔雀やなんかたくさんいると思うわ」

「ええ、たくさんいたわ」女の子がこたえました。

ジョバンニはその小さく小さくなつていまはもう一つの緑いろの貝ぼたんのように見える森の上にさっさと青じろく時々光つてその孔雀がはねをひろげたりとじ

たりする光の反射を見ました。

「そうだ、孔雀くじやうくの声だつてさつき聞こえた」カムパネルラが女の子に言いました。

「ええ、三十疋びきぐらいはたしかにいたわ」女の子が答えました。

ジヨバンニはにわかになんとも言えずかなしい気がして思わず、

「カムパネルラ、ここからはねおりて遊あそんで行こうよ」とこわい顔をして言おうとしたくらいでした。

ところがそのときジヨバンニは川下の遠くの方に不思議なものを見ました。それはたしかになにか黒いつるつるした細長いもので、あの見えない天の川の水の上に飛び出してちよつと弓ゆみのようなかたちに進すすんで、また水の中にかくれたようでした。おかしいと思つてまたよく気をつけていましたら、こんどはずつと近くでまたそんなことがあつたらしいのでした。そのうちもうあつちでもこつちでも、その黒いつるつるした変へんなものが水から飛び出して、まるく飛とんでまた頭から水へくぐるのがたくさん見えてきました。みんな魚のように川上へのぼるらしいのでした。

「まあ、なんででしょう。たあちゃん。ごらんさい。まあたくさんだわね。なんで

しようあれ」

睡そうに眼をこすっていた男の子はびっくりしたように立ちあがりました。

「なんだろう」青年も立ちあがりました。

「まあ、おかしな魚だわ、なんでしようあれ」

「海豚です」カムパネルラがそつちを見ながら答えました。

「海豚だなんてあたしはじめてだわ。けどここ海じゃないんでしよう」

「いるかは海にいるときまっていけない」あの不思議な低い声^{ひく}がまたどこからかしました。

ほんとうにそのいるかのかたちのおかしいことは、二つのひれをちようど両手^{りょうて}をさげて不動の姿勢をとったようなふうにして水の中から飛び出して来て、うやうやしく頭を下にして不動の姿勢のまままた水の中へくぐって行くのでした。見えない天の川の水もそのときはゆらゆらと青い焰^{ほのお}のように波^{なみ}をあげるのでした。

「いるかお魚でしょうか」女の子がカムパネルラにはなしかけました。男の子はぐったりつかれたように席^{せき}にもたれて睡^{ねむ}っていました。

「いるか、魚じゃありません。くじらと同じようなけだものです」カムパネルラが答えました。

「あなたくじら見たことあって」

「僕あります。くじら、頭と黒いしっほだけ見えます。潮を吹くとちようど本にあるようになります」

「くじらなら大きいわねえ」

「くじら大きいです。子供だっているかぐらいあります」

「そうよ、あたしアラビアンナイトで見たわ」姉は細い銀いろの指輪をいじりながらおもしろそうにはなししていました。

(カムパネルラ、僕もう行っちゃうぞ。僕なんか鯨だつて見たことないや)

ジヨバンニはまるでたまらないほどいらしながら、それでも堅く、唇を嚙んでこらえて窓の外を見ていました。その窓の外には海豚のかたちももう見えなくなつて川は二つにわかれました。そのまっくらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組まれて、その上に一人の寛い服を着て赤い帽子をかぶつた男が立っていました。

そして両手りょうてに赤と青の旗はたをもつてそれを見上げて信号しんごうしているのでした。

ジヨバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗はたをふっていました。にわかには赤旗あかはたをおろしてうしろにかくすようにし、青い旗はたを高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者しきしやのようにはげしく振りまわした。すると空中にざあつと雨のような音がして、何かまつくらなもの、いくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸てっぽうだまのように川の向こうの方へ飛とんで行くのでした。ジヨバンニは思わず窓まどからからだを半分出して、そつちを見あげました。美しい美うつくしい桔梗ききよういろのがらんとした空の下を、実に何万なんまんという小さな鳥どもが、幾組いくくみも幾組いくくみもめいめいせわしくせわしく鳴いて通とって行くのでした。

「鳥が飛とんで行くな」ジヨバンニが窓まどの外で言いました。

「どら」カムパネルラもそれを見ました。

そのときあのやぐらの上のゆるい服ふくの男はにわかには赤い旗はたをあげて狂気きやうきのようにふりうごかしました。するとぴたつと鳥の群むれは通とらなくなり、それと同時にぴしやあんといいつぶれたような音が川下の方で起おこって、それからしばらくしいんと

しました。と思つたらあの赤帽あかぼうの信号手しんごうしゅがまた青い旗はたをふつて叫さけんでいたので。「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥」その声もはつきり聞こえました。

それといつしよにまた幾万いくまんという鳥の群むれがそらをまつすぐにかけたのです。二人の顔を出しているまん中の窓まどからあの女の子が顔を出して美うつくしい頬ほおをかがやかせながらそらを仰あおぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそらのきれいなこと」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意気なまいきな、いやだと思いいながら、だまって口をむすんでそらを見あげていました。女の子は小さくほつと息いきをして、だまって席せきへ戻もどりました。カムパネルラがきのどくそうに窓まどから顔を引ひつ込こめて地図を見みていました。

「あの人鳥へ教しんえてるんでしょか」女の子がそつとカムパネルラにたずねました。「わたり鳥へ信号しんごうしてるんです。きつとどこからかのろしがあるためでしょう」カムパネルラが少しおぼつかないように答えました。そして車の中はしいんとなり

ました。ジョバンニはもう頭を引つ込めたかったのですけれども明るいところへ顔を出すのがつらかったので、だまってこらえてそのまま立って口笛を吹いていました。

(どうして僕はこんなにかなしのだらう。僕はもつところもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうつと向こうにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにはずかずつめたい。僕はあれをよく見てころもちをしずめるんだ)

ジョバンニは熱って痛いあたまを両手で押えるようにして、そっちの方を見ました。

(ああほんとうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだらうか。カムパネルラだってあんな女の子とおもしろそうに談しているし僕はほんとうにつらいなあ)

ジョバンニの眼はまた泪でいっぱいになり、天の川もまるで遠くへ行つたようにぼんやり白く見えるだけでした。

そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖の上を通るようになりました。向こう岸

もまた黒いいろの崖が川の岸を下流に下るにしたがつて、だんだん高くなつていくのでした。そしてちらつと大きなとうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大きな苞が赤い毛を吐いて真珠のような実もちらつと見えたのでした。それはだんだん数を増してきて、もういまは列のように崖と線路との間にならび、思わずジョバンニが窓から顔を引つ込めて向こう側の窓を見ましたときは、美しいそらの野原の地平線のはてまで、その大きなとうもろこしの木がほとんどいちめんに植えられて、さやさや風にゆらぎ、その立派なちぢれた葉のさきからは、まるでひるの間にいっぱい日光を吸った金剛石のように露がいつぱいについて、赤や緑やきらきら燃えて光っているのです。カムパネルラが、「あれとうもろこしだねえ」とジョバンニに言いましたけれども、ジョバンニはどうしても気持ちがおおきくありませんでしたから、ただぶつきらぼうに野原を見たまま、「そうだろう」と答えました。

そのとき汽車はだんだんしずかになつて、いくつかのシグナルとてんてつ器の灯を過ぎ、小さな停車場にとまりました。

その正面の青じろい時計はかつきり第二時を示し、風もなくなり汽車もうごかず、しずかなしずかな野原のなかにその振り子はカチツカチツと正しく時を刻んでいくのでした。

そしてまったくその振り子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすかな旋律が糸のように流れて来るのでした。

「新世界交響楽だわ」向こうの席の姉がひとりごとのようにこつちを見ながらそつと言いました。

全くもう車の中ではあの黒服の丈高い青年も誰もみんなやさしい夢を見ているのでした。

（こんなしずかないところで僕はどうしてもっと愉快になれないだろう。どうしてこんなにひとりさびしいのだろう。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といっしょに汽車に乗っているながら、まるであんな女の子とばかり談しているんだもの。僕はほんとうにつらい）

ジョバンニはまた手で顔を半分かくすようにして向こうの窓のそつを見つめてい

ました。

すきとおった硝子の^{ガラス}ような笛が鳴って汽車はしずかに動きだし、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの^{くちぶえ}口笛を吹きました。

「ええ、ええ、もうこの^{へん}辺はひどい高原ですから」

うしろの方で誰か^{だれ}としよりらしい人の、いま眼が^めさめたというふうではきはき談^{はな}している声^{こゑ}がしました。

「とうもろこし^{ぼう}だって棒で二尺も孔^{あな}をあけておいてそこへ播^まかないとはえないんです」

「そうですか。川^{かわ}まではよほどありましたようかねえ」

「ええ、ええ、河^{かわ}までは二千尺^{じやく}から六千尺^{じやく}あります。もうまるでひどい^{きょうく}峡谷になつているんです」

そうそうここはコロラドの高原じゃなかったろうか、ジヨバンニは思わずそう思いました。

あの姉^{あね}は弟^{むね}を自分の胸^{むね}によりかからせて睡^{ねむ}らせながら黒い瞳^{ひじみ}をうつとりと遠くへ

投^なげて何を見るでもなしに考え込^こんでいるのでしたし、カムパネルラはまださびしそうにひとり口笛^{くちぶえ}を吹^ふき、男の子はまるで絹^{きぬ}で包^{つつ}んだ苹果^{りんご}のような顔いろをしてジヨバンニの見る方^{かた}を見ているのでした。

突然^{とつぜん}とうもろこしがなくなつて巨^{おお}きな黒^{くろ}い野原^{のほら}がいつぱいにひらけました。

新世界交響楽^{しんせかいこうきやうがく}はいよいよはつきり地平線^{ちへいせん}のはてから湧^わき、そのまっ黒^{くろ}な野原^{のほら}のなかを一人のインデアンが白い鳥の羽根^{はね}を頭^{あたま}につけ、たくさんの石^{いし}を腕^{うで}と胸^{むね}にかざり、小さな弓^{ゆみ}に矢^やをつがえていちもくさんに汽車を追^おつて来るのでした。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。おねえさまごらんなさい」
黒服^{くろふく}の青年^{せいねん}も眼^めをさしました。

ジヨバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走^{はし}つて来るわ、あら、走^{はし}つて来るわ。追^おいかけているんでしよう」

「いいえ、汽車を追^おつてるんじゃないんですよ。獵^{りよう}をするか踊^{おど}るかしてるんですよ」
青年はいまどこにいるか忘^{わす}れたというふう^{ふう}にポケットに手^てを入れて立ちながら言^いいました。

まったくインデアンは半分は踊おどっているようでした。第一だいいちかけるにしても足のふみようがもつと経済けいざいもとれ本気にもなれそうでした。にわかにくつきり白いその羽根はねは前の方へ倒たおれるようになり、インデアンはぴたつと立ちどまって、すばやく弓ゆみを空にひきました。そこから一羽わの鶴つるがふらふらと落おちて来て、また走り出したインデアンの大きくひろげた両手りょうてに落おちこみました。インデアンはうれしそうに立つてわらいました。そしてその鶴つるをもつてこつちを見ている影かげも、もうどんどん小さく遠くなり、電しんばしらの碍がえし子がきらつきらつと続つづいて二つばかり光つて、またとうもろこしの林がけになってしまいました。こつち側がわの窓まどを見ますと汽車はほんとうに高い高い崖がけの上を走がけっていて、その谷ぞこの底には川がやつぱり幅はばひろく明るく流ながれていたのです。

「ええ、もうこの辺へんから下りです。なんせこんどは一ぺんにあの水面すいめんまでおりて行くんですから容易よういじゃありません。この傾斜けいしゃがあるもんですから汽車は決けつして向むこうからこつちへは来ないんです。そら、もうだんだん早はやくなったでしょう」さつきろうじんの老人らしい声が言いいました。

どんどんどんどん汽車は降りて行きました。崖のはじめに鉄道がかかるときは川が明るく下へのぞけたのです。ジョバンニはだんだんこころもちが明るくなつてきました。汽車が小さな小屋の前を通つて、その前にしょんぼりひとりの子供が立つてこつちを見ているときなどは思わず、ほう、と叫びました。

どんどんどんどん汽車は走つて行きました。室中のひとたちは半分うしろの方へ倒れるようになりながら腰掛にしっかりとみついでいました。ジョバンニは思わずカムパネルラとわらいました。もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいままでよほど激しく流れて来たらしく、ときどきちらちら光つてながれているのでした。うすあかい河原なでしこの花があちこち咲いていました。汽車はようやく落ち着いたようにゆつくり走つていました。

向こうとこつちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたつていました。「あれなんの旗だろうね」ジョバンニがやつとものを言いました。

「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいてあるねえ」
「ああ」

「橋はしを架かけるとこじやないんでしょうか」女の子いが言いいました。

「ああ、あれ工兵こうへいの旗はただねえ。架橋演習かきょうえんしゅうをしてるんだ。けれど兵隊へいたいのかたちが見えないねえ」

その時向むこう岸ぎしちかくの少し下流かりゆうの方かたで、見えない天の川の水がきらっと光って、柱はしらのように高くはねあがり、どおとはげしい音がしました。

「発破はっぱだよ、発破はっぱだよ」カムパネルラはこおどりました。

その柱はしらのようになった水は見えなくなり、大きな鮭さけや鱒ますがきらつきらつと白く腹はらを光らせて空中にほうり出されてまるとい輪わを描えがいてまた水に落ちました。ジヨバン二はもうはねあがりたくらい気持ちきもちが軽かるくなって言いいました。

「空の工兵大隊こうへいだいたいだ。どうだ、鱒ますなんかまるでこんなになってはねあげられたねえ。僕ぼくこんな愉快ゆかいな旅たびはしたことない。いいねえ」

「あの鱒ますなら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかないるんだな、この水の中に」

「小さなお魚もいるんでしょうか」女の子はなしが談はなしにつり込まれて言いいました。

「いるんでしよう。大きなのがあるんだから小さいのもいるんでしよう。けれど遠くだから、いま小さいの見えなかったねえ」ジヨバンニはもうすっかり機嫌きげんが直なおつておもしろそうにわらつて女の子に答えました。

「あれきつと双子ふたごのお星さまのお宮みやだよ」男の子がいきなり窓まどの外そとをさして叫さけびました。

右手ひくの低い丘おかの上に小さな水すい晶しょうでもこさえたような二つのお宮みやがならんで立たっていました。

「双子ふたごのお星さまのお宮みやってなんだい」

「あたし前つかになんべんもお母つかさんから聞いたわ。ちゃんと小さな水すい晶しょうのお宮みやで二つならんでいるからきつとそうだわ」

「はなしてごらん。双子ふたごのお星さまが何をしたつての」

「ほくも知しつてらい。双子ふたごのお星さまが野原あそへ遊あそびにでて、からすと喧嘩けんかしたんだらう」

「そうじゃないわよ。あのね、天あまの川がはの岸きしにね、おつかさんお話しなすつたわ、：

…」

「それから彗星ほうきぼしがギーギーファーギーファーで言いって来たねえ」

「いやだわ、たあちゃん、そうじゃないわよ。それはべつの方かただわ」

「するとあすこにいま笛ふえを吹ふいているんだらうか」

「いま海へ行いってらあ」

「いけないいわよ。もう海からあがつていらつしやったのよ」

「そうそう。ぼく知しってらあ、ぼくおはなししよう」

川の向むかこう岸ぎしがにわかわかに赤あかくなりました。

楊やなぎの木きや何かなにかもまつ黒くろにすかし出でされ、見みえない天あまの川がはの波なみも、ときどきちらちら針はりのように赤あかく光あかりりました。まつたく向むかこう岸ぎしの野原のほらに大きおほなまつ赤あかな火かが燃もされ、その黒くろいけむりは高たかく桔梗ききょういろのつめたそうそうな天あまをも焦こがししようでした。ルビルビーよりも赤あかくすきとおり、リチウムリチウムよりもうつくしく酔よったようになつて、その火かは燃もえているのでした。

「あれはなんの火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう」ジョバンニが言いました。

「蠍の火だな」カムパネルラがまた地図と首つびきして答えました。

「あら、蠍の火のことならあたし知ってるわ」

「蠍の火ってなんだい」ジョバンニがききました。

「蠍がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるって、あたし何べんもお父さんから聞いたわ」

「蠍って、虫だろう」

「ええ、蠍は虫よ。けどいい虫だわ」

「蠍いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかきがあつてそれで螫されると死ぬって先生が言つてたよ」

「そうよ。けどいい虫だわ、お父さんこう言つたのよ。むかしのバルドラの野原に一ぴきの蠍がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですって。するとある日いたちに見つかつて食べられそうになつたんですって。さそりは一生存けん命

にげてにげたけど、とうとういたちに押おえられそうになつたわ、そのときいきなり前に井戸いどがあつてその中に落おちてしまつたわ、もうどうしてもあがられないで、さそりはおぼれはじめたのよ。そのときさそりはこう言いつてお祈いのりしたというの。

ああ、わたしは今まで、いくつのももの命いのちをとつたかわからない、そしてその私わたしがこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命めいにげた。それでもとうとうこんなになつてしまつた。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだを、だまつていたちにくれてやらなかつたろう。そしたらわたしも一日生いちにちきのびたろうに。どうか神かみさま。私の心をこころごらんください。こんなにもなしく命いのちをすてず、どうかこの次つぎには、まことのみんなの幸さいわいのために私のからだをおつかいください。つて言いつたというの。

そしたらいつか蠍さそりはじぶんのからだだが、まっ赤なうつくしい火かになつて燃もえて、よるのやみを照てらしているのを見たつて。いまでも燃もえてるつてお父さんおつしやつたわ。ほんとうにあの火、それだわ」

「そうだ。見たまえ。そこらの三角標さんかくひょうはちようどさそりの形かたちにならんでいるよ」

ジヨバンニはまったくその大きな火の向こうに二つの三角標が、ちようどさそりの腕うでのように、こつちに五つの三角標がさそりの尾おやかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそのまつ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃もえたのです。

その火がだんだんうしろの方になるにつれて、みんなはなんとも言えずにぎやかな、さまざまの楽がくの音ねや草花くさばなのにおいのようなもの、口笛くちぶえや人々のざわざわ言う声こゑやらを聞きました。それはもうじきかくに町か何かがあつて、そこにお祭りまつりでもあるというような気がするのです。

「ケンタウル露つゆをふらせ」いきなりいままで睡ねむっていたジヨバンニのとなりの男の子が向むここの窓まどを見ながら叫さけんでいました。

ああそこにはクリスマスストリイのようにまつ青な唐檜とうひかもみの木がたつて、その中にはたくさんのおさんのおさんの豆電燈まめでんとうがまるで千の螢ほたるでも集あつまったようについでいました。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭さいだねえ」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ」カムパネルラがすぐ言いました。

(此の間原稿なし)

「ボール投げなら僕決してはずさない」

男の子が大いばりで言いました。

「もうじきサウザンクロスです。おりるしたくをしてください」青年がみんなに言いました。

「僕、もう少し汽車に乗ってるんだよ」男の子が言いました。

カムパネルラのとりの女の子はそわそわ立ってしたくをはじめましたけれどもやっぱりジヨバンニたちとわかれたくないようなようすでした。

「ここでおりなければいけないのです」青年はきちっと口を結んで男の子を見おろしながら言いました。

「厭だ。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい」

ジヨバンニがこらえかねて言いました。

「僕たちといっしょに乗って行こう。僕たちどこまでだっで行ける切符持ってるん

だ」

「だけどあたしたち、もうここで降りなけあいけないのよ。ここ天上へ行くところなんだから」

女の子がさびしそうに言いました。

「天上へなんか行かなくなつていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりもっといいところをこさえなけあいけないって僕の先生が言つたよ」

「だつておつ母さんも行つてらつしやるし、それに神さまがおつしやるんだわ」

「そんな神さまうその神さまだい」

「あなたの神さまうその神さまよ」

「そうじゃないよ」

「あなたの神さまつてどんな神さまですか」青年は笑いながら言いました。

「ぼくほんとうはよく知りません。けれどもそんなんでなしに、ほんとうのたった一人の神さまです」

「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です」

「ああ、そんなんでなしに、たったひとりのほんとうのほんとうの神さまです」
 「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前に、わたくしたちとお会いになることを祈ります」青年はつつましく両手を組みました。

女の子もちょうどその通りにしました。みんなほんとうに別れが惜しそうで、その顔いろも少し青ざめて見えました。ジヨバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

「さあもうしたくはいいんですか。じきサウザンクロスですから」

ああそのときでした。見えない天の川のずうつと川下に青や橙や、もうあらゆる光でちりばめられた十字架が、まるで一本の木というふう川の中から立つてかがやき、その上には青じろい雲がまるい環になつて後光のようにかかっているのです。汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのようにまっすぐに立つてお祈りをはじめました。あつちにもこつちにも子供が瓜に飛びついたときのようなよろこびの声や、なんとも言いようない深いつつましいためいきの

音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になり、あの苹果の肉のような青じろい環の雲も、ゆるやかにゆるやかに繞っているのが見えました。

「ハレルヤ、ハレルヤ」明るくたのしくみんなの声はひびき、みんなはそのそのその遠くから、つめたいそのの遠くから、すきとおったなんとも言えずさわやかなラッパの声をききました。そしてたくさんさんのシグナルや電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになり、とうとう十字架のちょうどま向かいに行つてすつかりとまりました。

「さあ、おりるんですよ」青年は男の子の手をひき姉は互いにえりや肩をなおしてやつてだんだん向こうの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら」女の子がふりかえつて二人に言いました。

「さよなら」ジヨバンニはまるで泣き出したいのをこらえておこつたようにぶつきらぼうに言いました。

女の子はいかにもつらそうに眼を大きくして、も一度こつちをふりかえつて、それからあとともうだまつて出て行つてしまいました。汽車の中はもう半分以上も空

いてしまいにかかにならんとして、さびしくなり風がいつぱいに吹き込みました。

そして見て見ているとみんなはつつましく列を組んで、あの十字架の前の天の川のなごさにひざまずいていました。そしてその見えない天の川の水をわたって、ひとりごうごうしい白いきもの人が手をのばしてこっちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのときはもう硝子の呼び子は鳴らされ汽車はうごきだし、と思ううちに銀いろの霧が川下の方から、すうっと流れて来て、もうそっちは何も見えなくなりました。ただたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち、黄金の円光をもった電気栗鼠が可愛い顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。そのとき、すうっと霧がはれかかりました。どこかへ行く街道らしく小さな電燈の行列にいた通りがありました。それはしばらく線路に沿って進んでいました。そして二人がそのあかしの前を通って行くときは、その小さな豆いろの火はちようどあいさつでもするようにほかっと消え、二人が過ぎて行くときまた点くのです。ふりかえって見ると、さっきの十字架はすっかり小さくなってしまい、ほんとうにもうそのまま胸にもつるされそうになり、さっきの女の子や青年たちがその前の

白い渚なげにまだひざまずいているのか、それともどこか方角ほうかくもわからないその天上へ行ったのか、ほんやりして見分けられませんでした。

ジヨバンニは、ああ、と深く息いきしました。

「カムパネルラ、また僕たち二人ふたりきりになったねえ、どこまでもどこまでもいっしょに行こう。僕はもう、あのさそりのように、ほんとうにみんなの幸さいわいのためならば僕ぼくのからだなんか百やべん灼やいてもかまわない」

「うん。僕ぼくだってそうだ」カムパネルラの眼めにはきれいな涙なみだがうかんでいました。「けれどもほんとうのさいわいはいつたいたいなんだろう」

ジヨバンニが言いいました。

「僕ぼくわからない」カムパネルラがほんやり言いいました。

「僕たちしつかりやろうねえ」ジヨバンニが胸むねいっぱい新しい力が湧わくように、ふうと息いきをしながら言いいました。

「あ、あすこ石炭袋せきたんぶくろだよ。そらの孔あなだよ」カムパネルラが少しそっちを避さけるようにしながら天の川のひととこを指ゆびさしました。

ジヨバンニはそつちを見て、まるでぎくつとしてしまいました。天の川の一とこに大きなまつくらな孔あなが、どおんとあいているのです。その底そこがどれほど深いふかか、その奥おくに何があるか、いくら眼めをこすつてのぞいてもなんにも見えず、ただ眼めがしんしんと痛いたむのでした。ジヨバンニが言いいました。

「僕ぼくもうあんな大きな暗やみの中なかだつてこわくない。きつとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕ぼくたちいつしよに進すすんで行いこう」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集あつまつてるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつ、あすこにいるのはほくのお母さんだよ」

カムパネルラはにわかまじに窓まどの遠とほくに見えるきれいな野原を指さして叫さけびました。

ジヨバンニもそつちを見みましたけれども、そこはほんやり白しろくけむっているばかり、どうしてもカムパネルラが言いつたように思おもわれませんでした。

なんとも言いえずさびしい気がして、ほんやりそつちを見ていましたら、向むこうの河岸かわぎしに二本ふたへんの電信でんしんばしらが、ちようと両りょうほう方ほうから腕うでを組くんだように赤あかい腕木うでぎをつらね

て立っていました。

「カムパネルラ、僕たちいっしょに行こうねえ」ジヨバンニがこう言いながらふりかえって見ましたら、そのいままでもカムパネルラのすわっていた席に、もうカムパネルラの形は見えず、ただ黒いびろうどばかりひかっています。

ジヨバンニはまるで鉄砲丸のように立ちあがりました。そして誰にも聞こえないように窓の外へからだを乗り出して、力いっぱいはげしく胸をうって叫び、それからもう咽喉いっばい泣きだしました。

もうそこらが一ぺんにまっくらになったように思いました。そのとき、

「おまえはいったい何を泣いているの。ちよつとこつちをごらん」いままでもたびたび聞こえた、あのやさしいセロのような声が、ジヨバンニのうしろから聞こえました。

ジヨバンニは、はつと思つて涙をはらつてそつちをふり向きました、さつきまでカムパネルラのすわっていた席に黒い大きな帽子をかぶった青白い顔のやせた大人が、やさしくわらつて大きな一冊の本をもっていました。

「おまえのともだちがどこかへ行ったのだろう。あのひとはね、ほんとうにこんや遠くへ行ったのだ。おまえはもうカムパネルラをさがしてもむだだ」

「ああ、どうしてなんですか。ぼくはカムパネルラといっしょにまっすぐに行こうと言ったんです」

「ああ、そうだ。みんながそう考える。けれどもいっしょに行けない。そしてみんながカムパネルラだ。おまえがあうどんなひとでも、みんな何べんもおまえといっしょに苹果をたべたり汽車に乗ったりしたのだ。だからやつぱりおまえはさつき考えたように、あらゆるひとのいちばんの幸福をさがし、みんなといっしょに早くそこに行くがいい、そこではかりおまえはほんとうにカムパネルラといつまでもいっしょに行けるのだ」

「ああぼくはきつとそうします。ぼくはどうしてそれをもとめたらいいでしょう」
「ああわたくしもそれをもとめている。おまえはおまえの切符をしっかりとつておいで。そして一しんに勉強しなけあいけない。おまえは化学をならったろう、水は酸素と水素からできているということを知っている。いまはたれだつてそれを疑や

しない。実験じっけんしてみるとほんとうにそうなんだから。けれども昔むかしはそれを水銀すいぎんと塩しおでできていると言いったり、水銀すいぎんと硫黄いおうでできていると言いったりいろいろ議論ぎろんしたのだ。みんながめいめいじぶんの神かみさまがほんとうの神かみさまだというだろう、けれどもお互たがいほかの神かみさまを信しんずる人たちのしたことでも涙なみだがこぼれるだろう。それか
らぼくたちの心がいいとかわるいとか議論ぎろんするだろう。そして勝負しょうぶがつかないだろう。けれども、もしおまえがほんとうに勉強べんきょうして実験じっけんでちゃんとほんとうの考くえと、
うその考くえとを分けてしまえば、その実験じっけんの方法ほうほうさえきまれば、もう信仰しんこうも化学かがくと同どうじようになる。けれども、ね、ちよつとこの本ほんをごらん、いいかい、これは地理ちりと歴史れきしの辞典じてんだよ。この本ほんのこの頁ページはね、紀元前二千二百年の地理ちりと歴史れきしが書いてある。よくごらん、紀元前二千二百年のことでないよ、紀元前二千二百年のころに
みんなが考くえていた地理ちりと歴史れきしというものが書いてある。

だからこの頁ページ一つが一冊さつの地歴ちれきの本ほんにあたるんだ。いいかい、そしてこの中に書いてあることは紀元前二千二百年ころにはたいてい本当ほんとうだ。さがすと証拠しょうこもぞくぞく出でている。けれどもそれが少しどうかなく考くえだしてごらん、そら、それは次つぎ

ページ
の頁だよ。

紀元前^{きげんぜん}一千年。だいぶ、地理^{ちり}も歴史^{れきし}も変わ^かわつてるだろう。このときにはこうなのだ。変^{へん}な顔をしてはいけない。ぼくたちはぼくたちのからだだつて考えだつて、天の川だつて汽車だつて歴史^{れきし}だつて、ただそう感じているのなんだから、そらごらん、ぼくといっしょにすこしこころもちをすかにしてごらん。いいか」

そのひとは指^{ゆび}を一本あげてしずかにそれをおろしました。するといきなりジヨバンニは自分というものが、じぶんの考えというものが、汽車やその学者^{がくしゃ}や天の川や、みんないっしょにぼかすと光つて、しいんとなくなつて、ぼかつともつてまたなくなつて、そしてその一つがぼかつともると、あらゆる広い世界^{ひろ}ががらんとひらけ、あらゆる歴史^{れきし}がそなわり、すつと消^きえると、もうがらんとした、ただもうそれつきりになつてしまうのを見ました。だんだんそれが早くなつて、まもなくすつかりもとのとおりになりました。

「さあいいか。だからおまえの実験^{じっけん}は、このきれぎれの考えのはじめから終^おわりすべてにわたるようではなければいけない。それがむずかしいことなのだ。けれども、

もちろんそのときだけのでもいいのだ。ああごらん、あすこにプレシオスが見える。おまえはあのプレシオスの鎖を解かなければならない」

そのときまっくらな地平線の向こうから青じろいのろしが、まるでひるまのようになうちあげられ、汽車の中はすっかり明るくなりました。そしてのろしは高くそらにかかって光りつづけました。

「ああマジエランの星雲だ。さあもうきつと僕は僕のために、僕のお母さんのために、カムパネルラのために、みんなのために、ほんとうのほんとうの幸福をさがすぞ」

ジョバンニは唇を噛んで、そのマジエランの星雲をのぞんで立ちました。そのいちばん幸福なそのひとのために！

「さあ、切符をしっかりと持っておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしにほんとうの世界の火やほげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。天の川のなかでたった一つの、ほんとうのその切符を決しておまえはなくしてはいけない」

あのセロのような声がしたと思うとジヨバンニは、あの天の川がもうまるで遠く遠くなつて風が吹き自分はまっすぐに草の丘おかに立っているのを見、また遠くからあのブルカニロ博士はかせの足おとのしずかに近づいて来るのをききました。

「ありがとう。私はいへんいい実験じっけんをした。私はこんなしずかな場所ばしょで遠くから私の考えを人に伝える実験じっけんをしたいとさつき考えていた。お前の言いつた語はみんな私の手帳てちょうにとつてある。さあ帰つておやすみ。お前は夢ゆめの中で決心けっしんしたとおりまっすぐに進すすんで行くがいい。そしてこれからなんでもいつでも私わたしのところへ相談そうだんにおいでなさい」

「僕ぼくきつとまっすぐに進すすみます。きつとほんとうの幸福こうふくを求めもとめます」ジヨバンニは力ちから強く言いいました。

「ああではさよなら。これはさつきの切符きっぷです」

博士はかせは小さく折おつた緑みどりいろの紙かみをジヨバンニのポケットに入いれました。そしてもうそのかたちは天気輪てんきりんの柱はしらの向むこうに見えなくなっていました。

ジヨバンニはまっすぐに走おつて丘おかをおりました。

そしてポケットがたいへん重くカチカチ鳴るのに気がつきました。林の中でま
つてそれをしらべてみましたら、あの緑いろのさつき夢の中で見たあやしい天の
切符の中に大きな二枚の金貨が包んでありました。

「博士ありがとうございます、おつかさん。すぐ乳をもって行きますよ」

ジョバンニは叫んでまた走りはじめました。何かいろいろのものが一ぺんにジョ
バンニの胸に集まってなんととも言えずかなしいような新しいような気がするの
た。

琴の星がずうつと西の方へ移ってそしてまた夢のように足をのばしていました。

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたので
した。胸はなんだかおかしく熱り、頬にはつめたい涙がながれていました。

ジョバンニはばねのようにはね起きました。町はすっかりさつきの通りに下でた
くさんの灯を綴ってはいましたが、その光はなんだかさつきよりは熱したというふ
うでした。

そしてたつたいま夢であるいた天の川もやつぱりさつきを通りに白くぼんやりか
かり、まっ黒な南の地平線の上ではことにけむったようになって、その右には蠍座
の赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに変わってもいない
ようでした。

ジョバンニはいっさんに丘を走って下りました。まだ夕ごはんをたべないで待っ
ているお母さんのことが胸いっぱいに思いだされたのです。どんどん黒い松の林の
中を通って、それからほの白い牧場の柵をまわって、さつきの入口から暗い牛舎
の前へまた来ました。そこには誰かがいま帰ったらしく、さつきなかつた一つの車
が何かの樽を二つ載つけて置いてありました。

「今晚は」ジョバンニは叫びました。

「はい」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「なんのご用ですか」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかつたのですが」

「あ、済みませんでした」その人はすぐ奥へ行って一本の牛乳瓶をもつて来てジ

ヨバンニに渡しながら、また言いました。

「ほんとうに済みませんでした。今日はひるすぎ、うっかりしてこうしの柵をあけておいたもんですから、大将さっそく親牛のところへ行って半分ばかりのんでしましましてね……」その人はわらいました。

「そうですか。ではいただいて行きます」

「ええ、どうも済みませんでした」

「いいえ」

ジヨバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもって牧場の柵を出しました。

そしてしばらく木のある町を通って大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になって、その右手の方、通りのはずれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行った川へかかった大きな橋のやぐらが夜のそらにほんやり立っていました。

ところがその十字になった町かどや店の前に女たちが七、八人ぐらいずつ集まっ

て橋の方を見ながら何かひそひそ談しているのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいつばいなのでした。

ジヨバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなつたように思いました。そしていきなり近くの人たちへ、

「何かあつたんですか」と叫ぶようにききました。

「こどもが水へ落ちたんですよ」一人が言いますと、その人たちは一斉にジヨバンニの方を見ました。ジヨバンニはまるで夢中で橋の方へ走りましました。橋の上は人でいっぱい河が見えませんでした。白い服を着た巡査も出ていました。

ジヨバンニは橋の袂から飛ぶように下の広い河原へおりました。

その河原の水ぎわに沿ってたくさんのあかりがせわしくのぼつたり下つたりしていました。向こう岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいていました。そのまん中をもう烏瓜のあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろにしずかに流れていたのでした。

河原のいちばん下流の方へ洲のようになつて出たところに人の集まりがくつきり

まっ黒に立っていました。ジョバンニはどんどんそっちへ走りました。するとジョバンニはいきなりさつきカムパネルラといっしょだったマルソに会いました。マルソがジョバンニに走り寄って言いました。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ」

「どうして、いつ」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこつたろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ」

「みんなさがしてるんだろう」

「ああ、すぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見つからないんだ。ザネリはうちへ連れられてった」

ジョバンニはみんなのいるそっちの方へ行きました。そこに学生たちや町の人たちに囲まれて青じろいとがったあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着て

まっすぐに立って左手に時計を持ってじっと見つめていたのです。

みんなもじっと河を見ていました。誰も一言も物を言う人もありませんでした。ジヨバンニはわくわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりして、黒い川の水はちらちら小さな波をたて流れているのが見えるのでした。

下流の方の川はばいっばい銀河が巨きく写って、まるで水のないそのままのそのように見えました。

ジヨバンニは、そのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかないというよ
うな気がしてしかたなかったのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ」と言いながらカムパネルラが出て来るか、あるいはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて誰かの来るのを待っているかというような気がしてしかたないらしいのでした。けれどもにわかにかムパネルラのお父さんがきつぱり言いました。

「もう駄目だめです。落ちてから四十五分たちましたから」

ジョバンニは思わずかけよって博士はかせの前に立って、ぼくはカムパネルラの行った方を知っています、ぼくはカムパネルラといっしょに歩いていたのです、と言いおうとしましたが、もうのどがつまってなんとも言いえませんでした。すると博士はかせはジョバンニがあいさつに来たとも思ったのですか、しばらくしげしげジョバンニを見ていましたが、

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚こんばんはありがとう」とていねいに言いました。

ジョバンニは何も言いえずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか」博士はかせは堅かたく時計とけいを握にぎったまま、またききました。

「いいえ」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ、ぼくには一昨日おとといたいへん元気な便たよりがあったんだが。今日きょうあたりもう着つくころなんだが。船ふねが遅おくれたんだな。ジョバンニさん。あした放課ほうかこ後ごみ

なさんとうちへ遊びあそに来てくださいね」

そう言いながら博士はかせはまた、川下の銀河ぎんがのいっぱいにうつた方へじつと眼めを送おくりました。

ジヨバンニはもういろいろなことむねで胸むねがいっぱいで、なんにも言いえずに博士はかせの前まへをはなれて、早くお母さんに牛ぎゆうにゆう乳ちゅうを持もって行いって、お父さんの帰かえることを知らせようと思うと、もういちもくさんに河原かわらを街まちの方かたへ走りはしりました。

底本…「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店

一九六九（昭和四四）年七月二〇日改版初版発行

一九八七（昭和六二）年三月三〇日改版五〇版

入力…幸野素子

校正…土屋隆

二〇〇五年八月一八日作成

二〇一〇年十一月一日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)
で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。